

# 『十六夜日記』

— 高校国語教材としての可能性 —

藏 中 さ や か

## はじめに

本学では2012年度より総合文化学科に国語教職課程（中学・高校）を設置し、従来の中学社会・高校地歴・公民に加え、国語の教員養成にも力を注ぐことになった。このこととも関わり、本稿では、『十六夜日記』を高校の国語教材（学習素材）として使用する場合を想定し、従来おこなわれてきた教育案を分類・整理した上で、本作品から〈中世の一女性の生き方を学ぶ〉ことを中心に据えた学びの展開を、高等学校学習指導要領に沿う形で提案したい。

2013（平成25）年度から年次進行により適用される高等学校学習指導要領（以下、新要領と称す）において、古典の学習は、「国語総合」、「古典A」、「古典B」のいずれかの科目でおこなうこととなるが、科目の履修順序については「第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」に、「古典A」、「古典B」は「原則として「国語総合」を履修した後に履修させるものとする」と示されている。「言語文化に対する関心を深め」る「国語総合」にも古典学習は含まれるが、「読むこと」に力を入れ、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に着目した内容を扱うのは「古典A」（古文と漢文のいずれか一方でも可）、「古典B」（古文と漢文の両方を含む）である。その科目開設パターンは「古典A」「古典B」両方、或いは片方のみが考えられるが、いずれを選択するかは各校に委ねられている。総合的な言語能力の育成をはかる科目として「国語総合」が設定されていることを考えると、本稿で取りあげる内容は取

捨選択し調整することで、「古典 A」もしくは「古典 B」の中で、或いは学校独自の探求学習、総合学習といった枠の中でおこなう実践という位置づけになる。

「古典 A」の目標には「我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」、また「古典 B」の目標には「古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」という文言が含まれ、古典文学作品の学習が人間としての成長を助けるものとして位置づけられていることが明確に示される。また、その学習が高校在学時だけに留まるものではなく生涯を通じて生き方に影響を及ぼすようなものとなることも求められている。高校における古典学習は、文法的知識の詰め込みや安直な現代語訳の提示による大意の把握ではなく、伝統的な言語文化全般への興味の促進をはかろうとするものであり、現代社会を生きる力そのものを育むものとならなければならない。今回の学習指導要領の改訂は、小中高すべてに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を置き、古典指導にこれまで以上の目配りをしたものとなっている。新要領が古典指導に課した期待は重く大きい。「古典嫌い」と言われる若い世代が多く存在する今、同一教材の取りあげ的角度を変えることで切り拓かれる学びの新たな領域を模索することを試みたい。

尚、『十六夜日記』という作品を取り上げるのは、稿者が本学の2012年度女性学セミナー「歩く女」第3回を担当したことと関わっている。周知のように『十六夜日記』は、作者が、亡き為家の妻として、我が子為相と前妻の子為氏との所領を巡る訴訟のために鎌倉へ旅した際の日記である。この度、セミナーの内容を熟考する過程で、本作品は作者の姿を具体的にとらえることのできる叙述が多数含まれるものであること、それ故に、近代に与えられた作品評価の問題など作者が女性であることと切り離しては考え難い多様な面を孕んでいることを再認識した。このような学習素材を積極的に教育現場に持ち込むことで新要領の謳う目標により近づくことが可能であると考え。近時の阿仏尼及び

## 『十六夜日記』

『十六夜日記』の研究には、岩佐美代子氏『宮廷女流文学読解考 中世編』（笠間書院 平成11（1999）年）や、三角洋一氏「特集・人はなぜ旅に出るのか—古代・中世文学に見る 訴訟の旅へ—十六夜日記」（『解釈と鑑賞』71-3通巻898号 平成18（2006）年）、田淵句美子氏による『物語の舞台を歩く 十六夜日記』（山川出版社 平成17（2005）年）、『阿仏尼』（吉川弘文館 平成21（2009）年）、「紫式部日記消息部分再考—『阿仏の文』から—」（『国語と国文学』85-12、平成20（2008）年）などの一連の論考がある。複数の書籍に研究文献目録が整備されており、研究現況が掴みやすいということも作品選択の理由の一つとなった。

以下の本稿における引用本文はすべて新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』所収の『十六夜日記』（校注・訳 岩佐美代子氏、底本九条家旧蔵天理図書館本）により、〈 〉内にそのページ数を記す。

### 一

高校教育現場では2013（平成25）年度より新要領に沿った新課程教科書が採用されることになるため状況は変化することになるが、現在使用されている教科書の中では、例えば第一学習社版の『高等学校 改訂版 古典（古文編）』（古典042）が『十六夜日記』より「駿河路」〈281～282〉「十六夜の月」〈286～287〉の2場面を採用し、旅程図、阿仏尼の肖像画なども載せている。本文部分は2場面合わせて3ページ相当で、各校の事情により異なるが高校2年次の後半で学習する機会が多い。この二場面選択は『伊勢物語』受容を背景に選択されており、これによって離れた本文箇所でありながら場面の連続性を保持し得ている。全8首と文章の長さには比して多数の和歌を含み、これらの読解を通して歌枕や修辞技巧について学び、「十六夜」というキーワードから作品タイトル、紀行文的日記の世界へと学習範囲を拡げることができる教材として編集されている。

上記の第一学習社版教科書の採用箇所からも窺えることであるが、従来おこ

## 『十六夜日記』

なわれてきている『十六夜日記』を用いた学習指導は、概ね、以下の(1)～(3)に大別される。

### (1) 紀行文学という側面から—地理、歌枕、地域社会と関わる総合的学習教材として

旅を含む日記であることから、その旅程に含まれる地域では、既に〈私たちが暮らす地域が舞台になった作品を学ぶ〉という観点から『十六夜日記』が取りあげられ、教材として提示されている。デジタル教材から具体例を二例示すと次の通りである。

#### イ) 愛知県総合教育センター愛知県文学資料館のホームページ

「愛知の郷土文学を教材にして、高等学校国語科授業の一助とする目的で開設されたもの」とある。

#### ロ) 荒川 憲行氏・戸田 崇氏・山本 城氏「かながわの学習資源に関する研究—「道」「外国人」「文学」を中心としたデジタル教材開発—」(『平成21年度神奈川県立総合教育センター研究集録』第29集)

「平成20年度より2ヶ年計画で、生徒にとって日々の生活の基盤である「かながわ」全体を視野に入れ、特に「道」「外国人」「文学」に焦点を当てた学習資源のデジタル教材開発を行った」もので、(3) 古典編の中に、『古事記』『更級日記』などとともに採録されている。

いずれも、作品中の場面と特定地域とを連繋することで学習者の興味を喚起し、身近な地域と文学との接点を実感させるような工夫がなされている。この枠組みを作品舞台以外に居住する生徒の立場へと拡張すると、『十六夜日記』を紀行文学としてとらえ、文学史と関連付けた学習及び歌枕に着目する学習が可能となろう。以下、①、②の通りである。

#### ① 紀行文学の流れと関連づける場合

第1時…紀行文学の流れをおさえ『十六夜日記』の文学史における位置を確認する。

第2時…平安期の日記的な紀行文学作品と比較しつつ本文を読解する。

②歌枕の意義と和歌読解に重点を置く場合

第1時…作品概要と旅程を確認し、著名な歌枕の存在を把握する。

第2時…著名な歌枕の従来の詠み方と本作との相違点を確認しつつ本文を読解する。

近時、『十六夜日記』の名所歌については、『夫木抄』の雅有、為相らの詠とともに「東海道の名所の歌枕を、これまでの詠み方にとらわれず、実感に基づきつつ、眼前の実景を描写した歌」とする見方が示された<sup>1</sup>。これを承けて安井重雄氏は

旅人は蓑うち払ふ夕暮の雨に宿借る笠縫の里〈275〉

誰か来て見附の里と聞くからにいとど旅寝ぞ空恐ろしき〈280〉

を含む2箇所を挙げて、これらの詠作が「都における観念的な歌枕詠とは明らかに異なる、旅の途上の地方における実地性を帯びている」ことを指摘している。また八橋を離れた直後、「紅葉いと多き山」を「人に問へば、宮路の山とぞ言ふ」場面〈278〉と、湯坂から浦に出た辺りでの「「いづこかと言ふ」と問へば、知りたる人もなし」という状況であった場面〈285〉とを掲げ、この時代には「関心を持った景色を詠み上げるには、まず土地の名を知らねばならないという認識があった」ことも述べている<sup>2</sup>。このような地名そのものへの関心、伝統的な歌枕であるか否かを問わず和歌に詠もうとする積極的な態度は、平安時代の紀行的な日記文学（『土佐日記』『更級日記』）との比較や特定の歌枕詠の変遷を通史的にみることで鮮明に浮かびあがる。以上のような観点から、①、②を発展的な取り組みとして提案したい。

尚、付言すれば、兵庫県に「ネットミュージアム兵庫文学館」が開設されているように、各地で文学者及びその作品と関わる特色ある企画が実行されている。現場で活用しうる教材が制作され、ネット上で、或いは紙媒体で公開されている場合が多い。作品舞台または作者の生涯から特定の土地に接点を求め情報を手繰り寄せることで、幅広い学習への門戸が拓けることは、どの作品においても共通である。

(2) 中世の政治、社会に着目して一日本史（中世）との融合教材として

古典文学と近接する日本史との融合教材として『十六夜日記』を活用する場合については、既に酒井一臣氏「〈教科研究〉高等学校歴史教育における史料活用について—教科間協力と高大連携の視点から—」（『パブリック・ヒストリー』第7号 大阪大学西洋史学会、2010年2月）という実践報告が公にされている。詳細は同報告に拠りたいが、酒井氏は

鎌倉時代の土地制度・訴訟制度・朝幕関係の実態を知ることでもできるが、授業で強調したのは、社会史的側面である。例えば、鎌倉時代の旅行はどのようなものであったか、女性が訴訟に出向くということは何を意味しているか、旅行が可能であったということが文化の伝播にどのような影響を与えているかなどである。

と述べ、歴史研究者の立場から実際にこの時代を生きた人物の作として『十六夜日記』の歴史的側面を強調する形で効果的に取りあげ、当時の生活を語る資料として教育に活用している。

同じ切り口で他に考えられる内容として、時代による東海道のルートや周辺宿駅の変化、和歌の「家」の存続、旅の実際、手紙のやりとり（料紙、書き方、伝達方法）などがあり、文化史的な事柄に注目した展開が可能であろう。

#### ①東海道のルートの変化と関連づける場合

第1時…中古、中世、近世の東海道ルートの変化、美濃路と鈴鹿路、足柄路と箱根路を確認する。

第2時…『十六夜日記』旅程を確認し、前半の路次の記から主要宿駅の部分を抜粋、読解する。

#### ②和歌の「家」の存続と関連づける場合

第1時…御子左家、阿仏尼の関係系図を確認、和歌の「家」の確立と存続を勅撰集のおおよその流れとともに把握する。

第2時…序文（268～269）を読解する。

(3) 『伊勢物語』の影響という側面から—先行作品を受容する作品として  
第一学習社版教科書の方向性をより強め『伊勢物語』東下り章段との関連箇所だけを取りあげ、その受容を読み解くことを中心とする授業展開も可能である。平安時代の代表的古典作品である『伊勢物語』が広く読み継がれ、八橋、宇津の山など、登場する土地が特別な意味をもってその地を通過する人々に受け入れられていたという事実を『十六夜日記』から読み解いてみたい。

第1時…『十六夜日記』作品紹介と旅程確認、『伊勢物語』東下り章段の本文を確認する。

第2時…『十六夜日記』関連部分〈277～278〉〈281〉を読解し、『伊勢物語』受容箇所の指摘と考察をおこなう。

『伊勢物語』東下り章段を受容した旅を描く作品は、『十六夜日記』以外にも『更級日記』など、多数ある。一例を挙げると、鎌倉期の八橋は既に実体不明のものとなっていたことは、『東関紀行』『うたたね』『春の深山路』などの記述を紹介することで説明ができる。

この他、『十六夜日記』においては作中の和歌の表現の源泉として、『古今集』『拾遺集』や『源氏物語』、西行の和歌が指摘されており、これらとの相互関係を検討する形で作品の枠を越えた学びの場を創造することができる。複数の作品を融合して授業を展開することは部分的で一面的な読みに陥る危険性もあるが、一つの事柄を複眼的に考える訓練にもなり、発展的取り組みとして可能であろう。

## 二

本稿で新たに提案したいのは、〈中世の一女性の生き方を学ぶ〉教材として『十六夜日記』を位置づけることである。前節(2)では、政治・訴訟などに重点を置いた実践報告を紹介したが、ここでは、社会の枠組みや制度を学ぶのではなく、阿仏尼個人の姿を照射し浮かび上がらせる読解により作者の姿を見つめることを目標とする。

## 『十六夜日記』

『十六夜日記』受容史については、田淵氏がその複数の論考で触れているが、まずその概略をまとめておきたい。『十六夜日記』は日本の近代においては、理想的な妻、母が世に遺した作品として女訓書的に修養もしくは啓発のための教材として用いられた、特別な作品である。例えば、楳野政子は、『十六夜日記』が1901（明治34）年発行の『女子国語読本』以来「女流古典文学」として近代の教科書に採録される事実を示し、次のように述べる<sup>3</sup>。

『十六夜日記』が他の女流作品が退場しても必ずとっていいほど取り上げられるのは、内実はともかく、作者阿仏尼が夫為家の死後、和歌の伝統継承に努力するとともに、我が子為相を思うあまり、鎌倉まで裁定を仰ぐためにでかけていった、まさに良妻賢母の代表とみなされたからである。

『女子国語読本』の前段階として指摘できるのが『文学界』を主宰した星野天知による「阿仏尼」という文章である。これは附録に阿仏尼作の『乳母の文』を収録する『文学界』創刊号（1893（明治26）年）に掲載された。その一部には、

乳母の文を読まば、其徳操高き思慮の阿仏を見るべく、夜の鶴を読まば、其歌道達眼の評者たる学才の阿仏を見るべく、去て十六夜日記を読まば、其濃情悲惨たる文学の阿仏を見るを得べし。抑々此尼が心血を犠牲としたる十六夜日記の鼓動に耳を澄まして、彼れが徒らに泣きたるの人にあらざることを観察し、其能く道に泣きたる九廻の腸を撫して、女文学者たらん者に味はしむるの要なからずやは。 （一部表記を改めた箇所がある）

とある<sup>4</sup>。この天知の文章では、阿仏尼の三作品がいわばお手本として掲げられる。それぞれ、思慮深さ・和歌の才・文学の才を象徴するものとして示され、書き手としての阿仏尼が前面に押し出されているが、中でも『十六夜日記』に格段の評価が与えられ、以降の文章中のほとんどが『十六夜日記』に対する言及となっている。

しかし文学史上の『十六夜日記』に対するこのような取り扱いは、1910（明治43）年に発見された『源承和歌口伝』<sup>5</sup>の阿仏尼批判とも言うべき内容が紹介



されるにつれて変化することとなる。同書には例えば次のような表現が含まれる。

イ) …末弟あつめて、阿房みづから文字よみして、心のまゝなる事ども申けるを、先人はそらねぶりして、彼の申まゝにて侍けるほどに、古今序に

あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは

此歌かきおとせりとて、ふるき本にはかにかきのせられけり、

ロ) さて、しづかに経よみてきかせよと侍しかば、とゞまりて侍し夜、阿房は一条殿へまいるとていでぬ、…阿房朝にかへりきたる、其程の振舞、心にたがふ事おほかりき、

ハ) 阿房、前中納言自筆にしるしをきたりし折紙の目六を取かくして、要書あまたかすめとゞめて、よろづの人にみせ侍りし比…

イ) では「ふるき本」であった『古今集』の序文の脱文を勝手に加筆したことが記され、ロ) では病床にあった為家を一人のこして外出する姿が描かれ、ハ) では御子左家伝来の目録を「取かくし」、家伝来の本を「あまたかすめとゞめて」多くの人に見せていた姿が語られる。源承の語り口は特に阿仏尼の妻としての部分を批判する点が特徴的であるが、いわば身内である源承によるこのような表現が知られたことによって作品評価は屈曲する。田淵氏は

阿仏尼は、それまでは子と〈家〉を守る女であったのが、逆に、明治から戦前までの固定的な長子相続制の中では、〈家〉の長子相続を妨げる悪女と捉えられるようになり、そして、実子への母性愛の部分だけが評価し得るものとして残されて、その面が誇大されたのではないだろうか。

と述べている<sup>6</sup>。

実際に、戦前に刊行された『十六夜日記』注釈書の解説部分から母の部分で強調した評語を掲げてみたい。例えば小室由三『十六夜日記全釋』（廣文堂1930（昭和5）年）の「総説」には次のようにある。

…人倫の廢れを嘆く人の親の憤と、二児の将来を憂ふる慈母の愛と、歌道の衰へを思ふ詞人の悲しみとは、こゝに彼女をして身をえうなきものにな

## 『十六夜日記』

し果て、ゆくりもなく旅立を決行せしめたのである。もとより裏面には、家督争といふような家庭的悲劇がその動因をなしてをるのであるが、母性の純情には遂にこの忌はしい紛争を解決せしめるだけの力があつたのである。

また竹野長次『方丈記・土佐日記・十六夜日記新釈』（敬文堂書店 1934（昭和9）年）の「序」は次のように記す。

凡て藝術は時代の反映であると共に、作者の個性の所産である。理知的な勝気な彼の性格と、母性愛に燃えてゐる至純の情熱とは全篇にその影を投げてゐる。

『十六夜日記』を女性の生き方と関わらせて取りあげようとする場合には、他作品とは際だって異なるこのような享受の在り方をまず理解しておかねばなるまい<sup>7</sup>。高校国語教材として『十六夜日記』を扱う立場からは、母・妻であることが〈家〉すなわち歌道家を背負うことであった、という阿仏尼の特殊な状況をおさえることが不可欠となる。鎌倉を目指し旅する阿仏尼の、歌人としての姿、夫の遺言を支えに歩む後半生、子のための相続を願うさま、これらを絡み合わせたものが本作品である。それ故に同じ作品でありながら、どの角度から作品を観るか、によってその評価は揺れ動く。

よって、『十六夜日記』を高校国語教材とする際には、一つの作品から作者の異なる側面を抽出することが可能であるという点にこそ着目し、作者の人物像を考え、その生き方の軌跡を辿り、女性としての多面的な生き方そのものを考える材料としたい。

### 三

ここまで述べてきたことを踏まえ、本節では具体的な学習指導計画案を示す。本文読解を通じて『十六夜日記』作者像を導き出し、女性が生きるということをご々の生徒が考える授業を目指したい。尚、「第3時」は近代以降の文章の読解も含む場合として設定し、『十六夜日記』の受容史を文献読解により

『十六夜日記』

辿り、各自の作品理解を深める過程として設定する。これは、新要領では教材について次のように述べていることを承けるものである。

古典A 3の(3)イ

教材には、古典に関連する近代以降の文章を含めること。また、必要に応じて日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを用いることができること。

古典B 3の(4)イ

教材には、日本漢詩文を含めること。また必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること。

\*\*\*\*\*

○学習内容

『十六夜日記』から作者阿仏尼の生涯を学び、作者の生き方や考え方などに関する文章中の表現を理解し、鎌倉期の女性の生き方について学ぶ。

○本文使用箇所

第1・2時

- 新全集〈268～269〉 序、出発の決意  
〈273～274〉 出発の日（逢坂の関・守山）  
〈275〉 美濃路  
〈283～284〉 富士山・富士河  
〈286〉 鎌倉入り  
〈298〉 為守三十首への返信

第3時【近代以降の文章の読解を実施する場合】

新全集〈303〉 後人奥書部分

以下の文章より必要箇所を適宜抜粋。

- ・星野天知「阿仏尼」（『文学界』創刊号 明治26（1893）年）
- ・風巻景次郎「阿仏尼の文学一特に十六夜日記に就いて」（『風巻景次郎全集 8』桜楓社 昭和46（1971）年、初出昭和4（1929）年）

【十六夜日記】

- ・富倉徳次郎『国文古典 随筆・日記・評論文学—研究と鑑賞—』（開文社 昭和31（1956）年）の解題
- ・田淵句美子氏の各論考
- ・岩佐美代子「阿仏尼の旅—我が子ども君に仕へんためならば」（『冷泉家歌の家の人々』書肆フローラ 平成16（2004）年）

○使用教材

本文プリント、補足プリント（系図、年譜、旅程表）、全文口語訳プリント（必要に応じて用意する）

近現代の作品評価に関わる文章プリント【「第3時」を実施する場合】

○ねらい

『十六夜日記』本文の読解を通じて、鎌倉期に生きた作者阿仏尼の姿を立体的に理解する。

作品を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにし、物事を多面的にとらえる力を養うとともに、自身の意見を発信する力を育てる。

○評価の観点

- ・関心・意欲・態度

重要古語の意味調べ、文法的事項の確認に自発的に取り組んでいる。

使用教材の内容を理解し、当時の人々の生活についてより深く思考している。

本文や資料から得た知識に照らし、自分の意見や疑問点を発言している。

- ・読む能力

本文を適切に解釈し、表現に即して場面を理解している。

本文の構成や展開を理解し、場面に応じた作者の心情を類推している。

- ・知識・理解（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

語句の意味、文法的事項、和歌の表現技巧を理解している。

系図、年譜、旅程表を適切に読み取っている。

当時の人々の暮らしについて、基本的な知識を身につけている。

先入観にとらわれず、中世の女性の生き方を理解している。

○指導計画（配当時間 50分×2または3）

### 第1時

**導入** 「和歌の家」とは、阿仏尼の生涯

**本文読解** プリントに掲げた本文を読解したあと、次の2面が感じ取れる箇所を指摘する。

イ) 母として                      ロ) 妻として

**考察** 嫁家を守り、自身の子の相続のために訴訟に及んだ行為を支えた作者の心情を作品から読み解くことで、阿仏尼の真の姿に迫る。

**まとめ** 作者に対して安易に「良妻賢母」「烈女」といったレッテルを貼るのではなく、旅立ちの背景を理解した上で、作者の置かれた状況や心情を考える。

### 第2時

**導入** 阿仏尼の生涯を復習

**本文読解** プリントに掲げた本文を読解したあと、作者の歌人らしい眼差しが感じられる箇所を指摘し、清新な和歌表現を味わう。

**考察** 第1時の内容を踏まえ、時代を生き抜いた作者の姿を歌人という観点から考察する。  
和歌の修辞技巧を理解し、その解釈を通して、旅の風景を和歌に詠みあげる歌人としての側面を把握する。

**まとめ** 叙情豊かな表現から作者のさまざまな横顔を読み取り、一人の人物像を各自で想い描き、文章にまとめる。→グループで阿仏尼の生き方について話し合い、考えをまとめ、発表する。

### 第3時 【近代以降の文章の読解を実施する場合】

**導入** 作品本文から読み取れる作者像を復習。後人奥書の読解により作品の背景を再確認する。

**本文読解** 近現代の評論文を掲げたプリントを読解する。

**考察** 近現代の作品評価を確認し、社会情勢と作品理解との結びつきの強さを感じ、評価の変遷を理解する。

**まとめ** 近現代の作品理解の例から、同じ作品であっても時代によって評価の観点がずれ、それによって揺れ動く作者像があったことを学ぶ。  
現代の研究者が執筆した文章から、現時点での作品評価を理解し、古典文学研究の世界の拡がりを感じる。

#### 《留意点》

- ・ 作者が置かれている状況をふまえ、場面ごとにその心情を理解することを読解のポイントとする。
- ・ 重要古語及び基礎的な文法事項については、適宜、発問し、生徒に考える機会を与える形をとる。
- ・ 一つの作品の中に垣間見ることのできる作者の多様な面を網羅的にとらえ、一面的な作者像をイメージすることのないよう助言を与える。
- ・ 近代の家族制度の問題が、古典文学作品や作者の評価に影響を与えてきたことを確認する。【「第3時」を実施する場合】

\*\*\*\*\*

#### おわりに

本稿では『十六夜日記』を対象に、古典教材としての可能性を考えてきた。ここまで述べた以外にも和歌贈答部分に特化し、歌ことばや場面ごとの和歌の機能に着目する、平安時代に成立した女性による日記文学作品と比較するなどの方向性が考えられよう。地域の歴史の中に作品を位置づける、身近な文化への関心を喚起しつつ読解を進めるといった取りあげ方は他の古典文学作品についても有効であり、以前から実践されている通りである。

入門レベルの古典学習においては語彙・文法の理解が最優先であり、そこで培った力がそのあとの礎となることは言を俟たない。その基礎力を伸ばし、真の古典学習の楽しさを味わうためには、〈読むこと（通釈をすること）〉に終始

するのではなくその先に〈考えること〉を求めることである。古典文学作品間で共有している文化的記号を認識し、自然観、親子の情愛、恋愛、師弟愛、義理人情、無常観といった人間の普遍的な営みから導かれる想いを理解し、共感をもって作品に対峙することは、長い人生の中で古典に関心を抱き続けることに繋がっていくだろう。

大学教育で取りあげるべき内容をも含む本稿の提案は、現実の高等学校教育現場からは乖離したものと映るかもしれない。しかし、たとえ僅かな配当時間数であっても、高校時代に発展的な学びを体験し、古典文学作品を読むことの醍醐味を味わうことは、その後の生徒自身の関心の在り方を大きく左右するに違いない。

本稿で述べたことへのご批正を頂いた上で、引き続き、高校教育現場からのバトンを受けておこなう大学における古典文学教育の在り方や方法を、稿者なりに考えていきたい。

## 注

- 1 田淵句美子氏「『夫木和歌抄』における名所歌一日記・紀行を中心に―」（『夫木和歌抄 編纂と享受』風間書房 平成20（2008）年）。
- 2 「紀行と和歌―地名を詠むということ―」（錦仁氏編『中世詩歌の本質と連関 中世文学と隣接諸学6』竹林舎 平成24（2012）年）。
- 3 「『高等女学校国語教科書―古典文学教材』にみる近代―精神的教化手段としての『女流古典文学』―」（『日本文学』53-12 平成16（2004）年12月）。
- 4 引用部分の前半を取り上げる榊原千鶴氏「『女子の悲哀に沈めるが如く』―明治二十年代女子教育にみる戦略としての中世文学』（飯田祐子氏他編『少女少年のポリテクス』青弓社 平成21（2009）年）は「天知は、亡父の遺志と子の将来を思っている所領争いのために鎌倉に下った阿仏尼の行動を「恋夫の神影」に発するものと捉え、「烈婦」「貞女」と評す。だがその一方で、阿仏尼の生きた時代を女流文学の盛時と振り返り、彼女の事蹟を掲揚し、明治の代に文学者たろうとする女性の味読すべきものと勧める」と述べている。
- 5 源承は早くに出家しているが、為家の実子で、母が宇都宮蓮生女、兄が為氏、弟が為教である。本稿における同書の引用は、源承和歌口伝研究会編『源承和歌口伝注

『十六夜日記』

解』(風間書房 平成16(2004)年)による。

- 6 『阿仏尼』(吉川弘文館 平成21(2009)年)、278頁より引用。
- 7 田渕氏は前出注6同書279頁で、「阿仏尼とその文学評価には、〈家〉の中で、母・妻として現実にどのようなであったかという点が、常に連ねられる。女性文学者の場合、こうした言及が多かれ少なかれつきまとうが、阿仏尼の場合は特に突出している。まずはこの見方をとりはずす必要がある」と問題提起をしている。



Summary

## *The Izayoi Nikki* as a Possible Teaching Material of the Japanese Language in High Schools

KURANAKA Sayaka

This paper concretely discusses various ways to take up *The Izayoi Nikki* by Abutsuni as a possible teaching material for 'Classics A' or 'Classics B' of high schools. Conventional education practices are broadly classified into 3 categories: (1) focusing on its aspect of traveler's literature; (2) connecting it with politics and societies of the Middle Ages; and (3) understanding that it is a piece of work that was influenced by *Tales of Ise*. This paper advocates for the first time to take up *The Izayoi Nikki* as a teaching material to consider the ways of life of women, and shows learning plans for the first to third classes.